

— 総説 —

日本における乳房下着の歴史的変遷 ～乳房ケアの意味を含むブラジャー～

磯野 みなみ¹⁾, 立岡 弓子¹⁾

1) 滋賀医科大学医学部看護学科 臨床看護学講座

抄録:【背景と目的】乳房ケアの担い手である助産師は、ケア用品としての乳房下着に関する研究に取り組んでこなかった。ブラジャーとしての定着とケア用品としての歴史的変遷を明らかとし、ブラジャーの意味について再考することを目的に文献研究に取り組んだ。【方法】2019年5月～9月、国立国会図書館デジタルコレクションにて関連書物を検索し、研究目的に該当する35文献を調査対象とした。【結果】乳房下着は、乳房を隠すことを目的に女性は着用していたが、社会進出によるライフスタイルの変化や洋装の定着により、乳房を美しく見せるための役割として変化していった。1800年頃(寛政12年頃)は、ブラジャーに乳房を支持する機能はなかったが、授乳期女性にとって、乳房の締め付けは乳汁産生と分泌を妨げることが理解されていた。1880年頃(明治13年頃)には、妊娠期女性のために、乳房を支えることは良いとされていたが、マタニティブラジャーが誕生したのは、70年後の1950年代(昭和25年)であった。【考察】女性が着用する乳房下着は、女性性の象徴として乳房を美しくみせるといった印象が時代とともに先行し、母乳栄養を行う女性のケア用品としての意味は、欠如していたことが示唆された。助産師として、授乳する女性のためのケア用品として、乳房変化に合わせた望ましいブラジャーの機能特性の見解を世に出すべく、研究に取り組んでいく必要がある。

キーワード: ブラジャー, 乳房ケア, 下着, 文献研究, 歴史

はじめに

現代では、女性下着のファッション性が多様化し、特にブラジャーは、多くの種類が商品化されている。商品開発で目的として目指しているコンセプトには、形を美しくみせる、胸を大きくみせる、といった内容に特化されており、ブラジャーはファッションの一部となり、女性性の象徴として受け止められている。女性は乳房を美しく保ちたいと願い、その容姿に一喜一憂し、理想とする乳房の形をもとめてブラジャーを購入している。しかし、子どもを産み育てる周産期女性を対象としたブラジャーの着用の目的には、妊娠期では、性ホルモンの影響により増大する乳房を支えること、授乳期には肩こり、乳房痛、背部痛、熱感といったマイナートラブルの予防や、乳房緊満状態の緩和ケアの根拠がある^[1]。妊娠期・授乳期の乳房状態の変化に適応させたブラジャーも販売されてはいるが、一般女性向けのブラジャーをそのまま使用しているのが目立つ。最近では、キャミソール型のブラジャーを着用する女性が目立ち、妊娠期に生じる乳腺の増殖による乳房痛を自覚しながら適切なサイズ・デザインのブラジャーを着用出来ていないことが多い。1990年頃(平成2年頃)までは、産後の授乳期に入る女性が着用する乳房下着として“さらし”の素材で製品化された“乳

帯”が分娩の入院時に配布されるお産セットの中に入っていたが、使用されなくなっていった。乳帯は、授乳期女性の乳房の大きさの変化に柔軟に対応でき、紐の調整により乳房を挙上させ乳房痛を緩和することができていた^[2]。今回、乳房ケア用品としての乳房下着の原点を探るべく、日本におけるブラジャー誕生までの歴史を紐解き、あらためてブラジャーの意味について、乳房ケアの担い手である助産師の立場から再考し、周産期女性のためのブラジャー開発の知見の一助を得ることを目的に文献研究に取り組んだ。

1. 研究背景

1) ブラジャーの起源

ブラジャーの起源は、紀元前千年初頭のギリシア文明時代に「アポテズム」という赤い細布を乳房の下に巻いていたことが始まりだとされている。その後、幅の広い帯へと変化し、胸をすっぽりと覆い、乳房を持ち上げて支え、揺れるのを防ぐ目的があったと考えられていた^[3]。ローマ帝国初期には、乳房が揺れる女性は蛮族の風習として軽蔑されたため、ローマの女性は胸を布で覆っていたと考えられている^[4]。乳房を固定するための「ストロフィウム」という下着を胸に巻いており、これは女性にとって一般的なものであったと述べられている^[5]。

Received: November 12, 2021 Accepted: February 3, 2022

Correspondence: 滋賀医科大学医学部看護学科 臨床看護学講座 磯野 みなみ

〒520-2192 大津市瀬田月輪町 mina620@belle.shiga-med.ac.jp

2) 乳房とセクシャリティ

乳房は、ギリシア文明時代では女性性の象徴と認識されていなかった。しかし、ローマ帝国が滅び、キリスト教全盛期の時代になると禁欲主義がはびこるようになり、女性の乳房は羞恥すべき部位へと変化したことが述べられている^[6]。しかし、この「隠す」という行為により、乳房に性的なイメージがついたと考えられている。

日本では、乳房に対する女性性の印象を持つものはいなかったという言説は根強く、近代になって西洋からの文化的影響を受け始めたことが、乳房を性的な印象として認識するようになったと述べられている^[7]。日本では女性の魅力は着物の袖からちらりと覗く足首や襟元の首筋に見出され、胸のふくらみやウエストの細さなどにさほど意識が向かなかつたためである。日本が乳房に対する認識の面で西洋文化の影響を受けた背景に、第二次世界大戦後にアメリカから日本に大量の物資が贈られ、洋装化した衣料品が多く輸入されたことが、日本人の洋装化を急速に推し進めたことを挙げている^[7]。

3) ブラジャーの誕生と女性の性役割

(1) 中世における女性の社会的地位

福島は中世のヨーロッパにおけるコルセット着用の要因について以下のように述べている^[8]。ヨーロッパでは17世紀頃から、上半身をきつく締め付け、胸を支えるためにコルセットが使用されるようになった。コルセットを着用すると、身体を締める付けるため女性は非常に動きにくい状態を強いられた。つまり、コルセットを着用している女性は働く必要がないことを意味していた。さらに、娘や妻が美しく着飾ることや、コルセットを身につけるには召使などの他者の力が必要であるため、女性の父親や夫の社会的地位や富の象徴であった。また、中世での女性の社会的地位は非常に低く、か弱く男性に守られる女性が女性らしいと認識されていたため、男性に対して女性らしい身体を強調し、「女性らしさ」を利用しなければいけなかった。

(2) 女性の社会的地位とファッション・下着の変化

古賀はヨーロッパのファッションと下着の変化について次のように述べている^[9]。19世紀になるとコルセットの急激な普及に比例するように、コルセットの害についても議論されるようになった。女性の自立を求める女性自身による服装改革の活動が活発になり、少しずつ定着していく。また、女性もテニス、サイクリング、乗馬、ゴルフなどの余暇を楽しむようになり、動きやすいファッションが求められたことや、パリの最先端ファッションがコルセットを必要としなくなったため、ファッションが少しずつ変化していった。さらに、第一次世界大戦(1914～1918年)の開始により、男性は戦地へ赴いたため、男性が担ってきた仕事を女性が担う必要があった。そのため、動きにくいコルセットや丈の長いスカートは着用されず、代わりに動き

やすい服装と胸を支える下着としてブラジャーの必要性が認識されるようになった。そして、戦争によって男性の役割を女性が代替することをきっかけに、女性の社会での活躍の場が広がったことで、乳房下着の形状や着用の意味が変化していった。

4) 海外のブラジャーに関する研究

現代において、いわゆる「ブラジャー」と呼ばれる乳房下着は、1914年にアメリカ人のMary Phelps Jacobという女性が2枚のハンカチをリボンで結んだ簡易的なものとして考案され、「backless brassiere」という名称で特許を申請したことが始まりであると広く知られている。しかし、Farrell-Beckら^[10]は、ブラジャーの発展は19世紀におけるアメリカの健康改革の追求に関連していること、コルセットの着用は、肺・消化器官・子宮への圧迫という医学的意見によって、女性がコルセットを手放したことが要因と述べている。また「backless brassiere」の誕生以前からブラジャーが存在したことについては以下のように報告している。

Luman Chapmanは、乳房を上支持していたコルセットに代わり、アメリカではじめてのブラジャーを考案した。また、医師や看護師を含めた発明者は、ブラジャーのファッション性より健康的作用に関心をもっていた。医師であるTalbot R. Chambersは「乳房の腫脹・緊満・硬結を治療、軽減するため」として、初めてマタニティ用のブラジャーを考案している。その後、1894年から1938年の間に、多くの発明者によって38のマタニティ用ブラジャーの特許が取得された。このように、「brassiere」が誕生する以前より数多くの乳房下着が女性の健康、特に妊娠期・産後の女性のために発明されていた貴重な歴史がある。

5) ブラジャーの名称

海外においてブラジャーは、「Improvement in corsets」「Breast compressor」「Breast shield」「breast band」「bust girdle」「bust support」「bandeau」「empire short stay」「brassiere」と様々な名称で特許が取得されている^[10]。

日本においては、「乳房バンド」「乳バンド」「乳おさへ」「乳カバー」「ブラジエア」「ブラジャー」「美容肌着」という名称で呼ばれていた^[11]。

このように、ブラジャーの誕生はヨーロッパを起源とし日本に知られるようになり、女性の社会進出、ライフスタイルの変化とともに、洋装の定着からブラジャーが広まった。また、アメリカでは健康思考からブラジャーが考案されていた歴史がある。しかし、日本では、医療関係者による乳房下着の考案がなされていたのか、明らかになっていない。そこで、今回、女性が乳房に着用するブラジャーの意味について、特に授乳する女性の乳房下着の意味について、日本においてブラジャーが定着した歴史を紐解くことで明らかにする研究に取り組んだ。

2. 研究目的

- 1) 日本においてブラジャーが定着するに至った歴史の変遷について考察する。
- 2) ブラジャーの着用と乳房ケアの関連性の知見について、歴史的に考案されていた内容を検討する。

方法

1. 研究デザイン

文献研究

2. 文献抽出方法

- 1) 使用データベース
国立国会図書館デジタルコレクション
- 2) 検索日時
2019年5月～9月
- 3) 検索方法

2019年5月～9月に国立国会図書館デジタルコレクションにて、「乳房バンド」「乳バンド」「乳おさへ」「乳カバー」「ブラジエア」「ブラジャー」「美容肌着」「妊婦 衣服」「妊婦 下着」「乳帯」のキーワードで文献検索した(1800～1970年)。「乳房バンド」1件、「乳バンド」3件、「乳おさへ」4件、「乳カバー」5件、「ブラジエア」8件、「美容肌着」1件がヒットしそれぞれ抽出した。「乳帯」は検索結果が0件であった。「ブラジャー」57件がヒットし、そのうちブラジャーの作成方法、使用方法、商品紹介に関する文献7件を抽出した(1940～1967年)。「妊婦 衣服」126件、「妊婦 下着」が25件ヒットし(1800～1970年)、そこから妊婦のブラジャーについて関連のある文献を6件抽出した(1800～1925年)。

3. 分析方法

以上により得られた35文献について以下のように分析した。

分析対象とした文献の内容を、ブラジャーの使用目的、乳房ケア用品としてのブラジャー、デザインと素材に分類した。これらの結果から、ブラジャーが日本で定着した背景と、乳房ケアとして使用されていたブラジャーの知見について考察した。

結果

1. ブラジャーの名称・使用目的と素材の変遷 (表1)

ブラジャーに関する最も古い雑誌とされる『主婦の友』では、「姿をよく見せる乳おさへの作り方～お乳が大きくてお困りの方は是をお用ひなさいませ～」というタイトルでブラジャーの作り方が記されている^[12]。使用目的として、「だんだん着物が薄くなつてお乳の大きい方はお困りのことゝ存じますから、少しでも姿をよく見せるやうに、日本人の身體(からだ)にぴつたりあてはまつて、衛生にも適ひ、誰にも簡単にできる乳おさへの作り方をご紹介しますませう。」と述べられ

ている。さらには、授乳中の女性は乳房が張って窮屈になるため、「安心乳カバー」の使用を勧めている。「お乳のあたる部分が、薄い軟らかいゴムになつてをりますから、お乳が張つてもお召物に染み出たり乳首が不潔になつたりするおそれがありません」と記されており、授乳する女性にとって不快である乳汁漏れに対するケア用品であることを意味するものである。

1930年頃(昭和5年頃)からは、「和洋服に用ひられる汗よけ兼用の乳おさへ」というタイトルで『婦人倶楽部』に作成方法が記されている^[13]。使用目的の説明はないが、汗よけ兼用として用いられていた。新時代の洋服裁縫では、「お乳の形其儘が衣服の外形に迄表れる事はよくないので乳カバーを用いる」と述べている^[14]。また、「西洋婦人は入浴後直に胸部に冷水で冷し、乳カバーをすぐかけるとの事である」と記されているが、その根拠は示されていない。1935年頃(昭和10年頃)からは、「洋服を美しく着るため」「婦人の胸部を美化させるバンドである。乳の大きすぎて歩行に際してぶらぶらするやうな人は、このバンドにより多少しめてこれを補う。又反対に小さい婦人は、ブラジエアにスポンジ又は綿等を入れて女性美を表したりもする」と記されている^[15]。1940年頃(昭和15年頃)には乳房が大きすぎたり、小さすぎたりする場合、程よく胸を美しく保つために必要だと記されている。また、乳房が大き過ぎる者は簡単なデザインにして、小さ過ぎる者はレースを何段も用いる、あるいは綿を入れて複雑なデザインし、ふくらみを持たせることについて示されている^[16]。乳おさへにより、乳房を美しく見せるといった、乳房下着の意味が女性性の意味を含むようになっていったことがわかる。

1960年(昭和30年)には「湯上り用ブラジャー」が登場し、夫婦だけの場合は問題ないが、同居人がおり、胸の突起が気になる場合に入浴後の使用を勧めている^[17]。ファンデーション&ランジェリー年鑑では、下着そのものがファッション化の傾向にあると記されている^[18]。

2. 乳房ケア用品としてのブラジャー

1800年頃(寛政12年頃)は乳房を支える、保護するといった記載は見られなかった。しかし、妊娠によって乳房は増大し、きつく締め付けることは乳汁分泌を妨げ、乳房が張れる疾病が生じることがあるため、ゆったりとした衣服を身に着け、乳房を締め付けないようにするのがよいと記されている^[19]。1881年(明治14年)には、妊娠すると乳房は大抵大きくなり、また急に肥るような際には、捫胸(むなあて)を乳房の当たる所の両方に紐をつけて自由に緩まるようにすると記されている^[20]。また乳腺炎が生じた場合においても、乳房の垂れ下がりを防ぐことの重要性が示されている。1897年(明治30年)には、乳房が張り詰める時は綿花、または布を用いて軽く押し上げると記されていた^[21]。しかし、これらの根拠については述べられていな

い。

1950年頃（昭和25年頃）には、「乳バンドを用いて陥没乳頭の悩みを解消した一例」について報告されている^[22]。乳バンドの乳頭部分に直径6.5センチの穴をあけ使用したところ、「膨満緊張した乳房を固定するため、乳腺炎の予防にも役立ち、その後は陥没乳頭で苦しむことがなくなりました」と記されている。また、服装に留意し、あまり乳房を強く圧迫させないように指導することの必要性について述べられている。1972年（昭和47年）には産婦が乳房を冷やすことを目的とした「乳房用ソフトアイスとブラジャー」が考案されている^[23]。

このように、母親が着用する乳房下着にはケアの意味を含んでいたことがわかる。

3. ブラジャーのデザインと素材

1940年頃（昭和15年頃）までは、既製品のブラジャーよりも作成方法に関するものが多い。1920年頃（大正9年頃）のブラジャーは現代でいう“ブラジャー型”であり、前をホックで開くデザインであった。素材は薄い生地が良く、キャラコ、富士絹、羽二重などが勧められていた。また、乳房をしっかりと抑える目的のために、伸びやすい斜布だけは避ける必要があると記されている^[12]。1930年頃（昭和5年頃）には、冬は富士絹、クレープデシンが最も適し、又絹、ジャージー等もよいが斜布で作るのが1番理想であり、夏はクレープデシンかネンスークが良いと述べられていた^[15]。1940年頃（昭和15年頃）には、前開きで鉤がけのもの、後開きで鉤がけのもの、脇開きで鉤がけのものが登場する。様々なデザインが考案されているが、1番便利なのは前開きと述べられていた。生地はシミーズかスリップの裁落し布を用い、色はピンク、白、クリームなどの薄い色がよいこと、さらにレースが施され、ブラジャーへの装飾がなされるようになる^[24]。1950年頃（昭和25年頃）には、ドレスが透けた布地の際に使用するストラップなしのデザインが登場し、布地は洗濯のきく木綿がよいが、夏はレースやナイロン、チュールを用いてもよく、冬はネルを裏打ちするものもよいと記されている^[25]。

1950年頃（昭和25年頃）以降は、下着メーカーの誕生を受けて、既製品ブラジャーが多くみられるようになる^[26]。パストラインからウエストラインにかけてシルエットを美しくするための「キャミソル型ブラジャー」や、授乳がしやすいようにデザインされた「マタニティ型ブラジャー」が発売された。しかし、具体的に授乳しやすいデザインの根拠については述べられていない。しかし、その後ブラジャーについて医学的視点として、「なるべくブラジャーを強くしめることは避けること」「ブラジャーと乳房との間の気温は1～1.5cm高くなるため吸水性・通気性のないゴムパッドの使用には注意が必要であること」「ナイロンレースやビニール素材の肩紐は湿疹やシミが生じることがあり、これはアレルギー性か吸湿性の悪さによる蒸れからおこる可能性がある」と記されていた^[27]。しかし、授乳に関する視点ではなく皮膚症状に関する内容にとどまっていた。

1960年頃（昭和35年頃）には、カップ部が立体的となり、ドレスを着用する際に着用する「ストラップレスブラジャー」や、V字型のネックラインの洋服を着る際に着用する「ブランジングブラジャー」が発売されている^[28]。

考察

1. 日本におけるブラジャーの普及とその背景

日本ではおおむね室町・戦国時代以降、封建制の確立に伴い家督の観念が形成され、家長権が強まり女性は「家」に属するようになった。江戸時代では「女訓書」において女性は先天的に知性・理性が男性に劣り、判断力を伴わないために独立して行動することは許されず、男性は外を治め女性は内を治めると定めていた^[29]。1900年頃（明治33年頃）、男性の洋装化が加速したが、女性において洋装はごく一部の上流婦人のみがドレスを着用し、一般的には和装が圧倒的に多かったといわれている^[30]。和装は着付けに手間がかかると共に活動に不便を伴うが、外で働く権利が乏しかった女性にとって軽快な洋装が必要なかったと考えられる。また、和装における下着は、当時の着付けに関する文

表1. ブラジャーの名称・使用目的・素材の変遷

年代	1920年代	1930年代	1940年代	1960年代
名称	乳おさへ	乳カバー お乳バンド ブラジェアー	乳房バンド ブラジェール ブラジェア ブラジャー	ブラジャー
使用目的	姿を美しくみせるもの 乳汁漏れ対策	和洋装に用いる汗除け兼用 洋服を美しく着るため 胸部を美化させるため	乳首が服から透けるのを予防する 胸のふくらみを美しくみせる	下着そのものがファッション
素材	富士絹 羽二重 キャラコ	クレープデシン ネンスーク ジャージー 斜布 富士絹 又絹	スリップの裁落し布 シミーズ レース 柄物	木綿 レース ナイロン チュール

献によると、肌襦袢、長襦袢を重ね着し、腹部全体を伊達巻でしっかり巻いたのちに上着を着るとされていた^[31]。

男性に遅れて女性の洋装化が始まった背景に、女性が就く職業の誕生が考えられる。喫茶店の女給やレストランのウェイトレスが急増したことで^[32]、働く女性たちの服装は軽快な洋装の利用が増加した。この頃にブラジャーが海外から日本に紹介されており、洋装で働く女性を中心に使用され始めたのではないかと推察する。また、一般的には多くの女性が外出着、室内着ともに和装が中心であったが、1920年頃(大正9年頃)には、夏になるにつれて着物が薄くなると、胸が大きい人は困るだろうからという理由でブラジャーの使用を勧められており^[12]、和装であっても特に胸の大きな女性は、ブラジャーを着用していたことの根拠に、和洋装に用いることができる汗除け兼用のブラジャーが紹介されている。

第二次世界大戦(1939~1945年)中には、戦時下の経済難が就労女性人口の増加に拍車をかけた。また、戦後は日本国憲法(1947年施行)に法の下での平等と性差別等による差別の禁止、自由権・参政権、婚姻の自由と両性の本質的平等が明記され、女性が男性と同等の権利を獲得した時代であった^[33]。1950年頃(昭和25年頃)は高度経済成長期を迎え、女性が労働市場へ進出し、洋装が一般市民にまで定着した。田中は、就業についての女性が洋装を選択した理由は、洋装の機能性や経済性だけではなく、精神的変化も大きく、つまり就労という行動傾向は洋装によって得られる解放感に合致したこと、洋装を経験した女性は服装で個性や趣味を表現できる自由を実感したこと、洋服・洋装の長所を理解する経験や機会が形成されたことが女性洋装の広がりをもたらし、日本においてブラジャーは健康面よりも洋装を美しく着こなすため、見た目を美しく見せるためとして紹介されていたことから、女性が女性らしさを表現する自由の権利を獲得し、洋装が一般市民にまで普及したことによって、ブラジャーの必要性が広く認識されたと考えられる。

2. 女性が求めたブラジャーのデザイン性

1920年頃(大正9年頃)の素材は生地の薄いものがよく、胸を抑える目的があるため伸びやすい斜布だけは避ける必要があった^[12]。職業に就く女性が洋装を身に付け、ブラジャーを着用するようになるが、広く普及するまでには至らなかった。1930年頃(昭和5年頃)以降は、富士絹、クレープデシン、又絹、チャージー等がよいが斜布で作るのが1番の理想とされたが^[15]、これらの素材は現代のブラジャーの生地と比較して伸縮性が乏しく、乳房に下着をつける文化がなかった日本人女性にとって快適感を感じにくかったことが、ブラジャー普及に時間を要した原因のひとつと考える。

1920年頃(大正9年頃)にブラジャーが紹介されてからしばらくは無地でシンプルなデザインであったの

に対し、戦後の1940年頃(昭和15年頃)は前開き・後ろ開きといった様々なデザインや、レースを用いた装飾、柄物の生地などが用いられ、ブラジャーにファッション性が表れている^[24]。これはアメリカからの物資や繊維技術の発達だけではなく、女性が自由の権利を獲得したことで、洋装と同じく下着においても個性や志向性が取り入れられるようになったことが影響しているのではないだろうか。下着に現れるデザイン性が、後にブラジャーにファッション化するきっかけになったと考える。

洋装ブームが訪れた1950年頃(昭和25年頃)にブラジャーが普及し始めるが、それでもなおブラジャーは中年以上の女性の崩れた体型を直すものとされ、普及には至らなかった^[35]。1960年頃(昭和35年頃)に入り、立体的でストレッチ素材のブラジャーが登場し、フィット感や付け心地の軽さや快適感が向上した^[36]。さらに下着メーカーによって下着ショーが開催されるようになり、メディアにより、ブラジャーがしだいに幅広い年齢層に浸透したと考えられる。

3. 乳房ケアとしてのブラジャーの機能性

1800年頃(寛政12年頃)には乳房を支えるという概念はなかったが、乳房の締め付けは乳汁分泌を妨げると認識されており、古くから乳房の締め付けには否定的見解が多かった^[19]。2021年(令和3年)現在、ブラジャーの着圧と乳汁分泌に関するエビデンスは検証されていないが、臨床現場ではブラジャーの締め付けの跡が強く残っている母親や、乳房熱感や発赤症状を訴える者が多くいる。ブラジャーの着用が当たり前の現在でも、授乳に適するブラジャーの設計に関する科学的エビデンスはない。

1880年頃(明治13年頃)にはイギリスの書籍を翻訳した『母親の教』のなかで、妊娠の際には乳房を捫胸(むなあて)で支えると良いとされ、妊娠期から乳房を支えるというケアが、海外から日本に伝えられていた^[20]が、乳房を支えることの具体的な利点については述べられていなかった。石田らはさらに乳房を持ち上げた際の快適感について、乳房の大きさに伴い、快適である乳房の引き上げ距離と引き上げ力は大きく、さらに快適であると感じている範囲も大きいと報告している^[37]。しかし、一般女性を対象とした研究結果であり、授乳期の女性を対象としたものではないが、乳房内の乳腺の発育や乳汁産生による乳腺腔内の貯留により、乳房重量が増えることで負荷が身体にかかっているであろうと推察している。したがって、妊娠期や授乳期に乳房を支えることは、女性が快適感を得るためのケアとして有効であると考えられる。しかし、日本では着物文化であったこと、「垂乳根の母」に関する短歌が多く唄われていたように、乳房の下垂は子どもを育てる母の象徴であるイメージがあり、乳房を支えることの必要性が理解されてこなかったと考える。

1920年頃(大正9年頃)には乳汁漏れを防ぐ「安心

乳カバー」が紹介されており^[12]、当時から乳汁漏れという女性の悩みが存在し、ケア用品として製品化されたと考えられる。海外ではこの時期には既に産後の乳房緊満を軽減し、授乳しやすい設計から誕生したマタニティブラジャーが製品化しているが、日本には伝えられていなかった。海外では、マタニティブラジャーは医師や看護師がブラジャーの健康への効果に着目した意見を取り入れて広く販売されたが^[10]、日本ではブラジャーが普及していない時代に医療者がブラジャーの効果について意見するきっかけがなかったのではないだろうか。その背景に乳母の存在もあったものと推察する。日本でマタニティブラジャーが登場するのは1950年頃（昭和25年頃）であり、下着メーカーによって紹介されている^[26]。同時期に有井は、助産ケアの視点において陥没乳頭を改善するためのブラジャーを考案しており、現在の乳頭ケア用品として使用された“プレストシールド”の前進であったといえる。陥没乳頭の妊婦に対して夫に吸ってもらうように指導したが夫が協力しなかったため、乳バンドを考案したと述べており、当時は乳頭ケア用品が存在しなかったこと伺える。陥没乳頭は母乳育児を困難にする要因であり、乳頭突出のための助産師による早期のケアが必要だと考えられている^[38]。1950年頃（昭和25年頃）には、助産師が妊娠からの乳房ケアの必要性を認識していたこと、ケア用品としてブラジャーに着目し、妊娠期の乳房ケア、産後の乳頭トラブル予防に使用していたことが明らかとなった。また、この頃から医学的な視点でブラジャーの設計や生地について述べられるようになっており^[27]、ブラジャーによる女性の健康への効果について意識されるようになったと考える。しかし、これらを研究として取り組み科学的根拠に基づいた報告はない。昭和から平成かけて、助産師がケア用品としてブラジャーについて研究した成果はない。下着メーカーにお任せ状態であったといえる。今一度、この歴史を振り返り、乳房に優しい授乳期女性の必需品であるブラジャーの設計に、助産師の意見が参画できるよう研究を行っていくことは必要である。

4. 現代女性が求めるブラジャー

ブラジャーの普及の歴史を紐解くと、女性の社会的立場が影響していることが明らかとなった。現代では、各国の社会進出における男女格差を示すジェンダー・ギャップ指数において日本は最も低い位置にあるが、総合職や管理職に就き、スーツで仕事に就く女性が増えている。また、結婚・出産後も就業を継続する女性が増加していることもあり、妊娠・授乳育児をしながら就業している女性が今後は増加していく可能性が考えられ、妊娠や授乳による乳房の変化に対応できるケア用品としてのブラジャーの快適性を求める声が上がるとは大いに推察できる。

乳房ケア用品としてブラジャーを位置づけ、その歴史の変遷から、1880年頃（明治13年頃）には、すでに

ケア用品として乳房の形状変化に対応し、乳汁分泌までも考慮してマタニティブラジャーが製品化されていたにもかかわらず、昭和に入り、人工栄養の導入とともに、乳房下着については妊娠期や授乳期の乳房状態に見合ったブラジャーが考案される流れは衰退していったことが明らかとなった。

妊娠期の乳房ケアに関しては、飯田らの調査で日本のBFH（baby friendly hospital：赤ちゃんにやさしい病院）施設の9割が「乳頭・乳房ケアが必要」と答え、実施していることを報告している^[39]。しかし、助産師は乳房、乳頭マッサージのケアは行っているが、母親が着用しているブラジャーの用途や選択方法まで乳房の形状に合わせて指導していない現状がある。明治時代には、すでに乳房を締め付けないこと、胸を支えることの利点が理解され着用する下着についても言及されていたが、現在、妊娠期からブラジャーの使用用途や妊婦にて適した形状のブラジャーの選別方法まで考えている助産師はどれくらいいるのだろうか。

助産師は妊娠初期の段階から、今後の乳房変化、起こり得るマイナートラブル、乳房変化に合ったブラジャーの使用について保健指導を行う必要がある。また、産後の乳房緊満や乳汁生産に効果的なブラジャーの特性が明らかになれば、乳房トラブル予防とスムーズな母乳育児の支援につなげることができる。そのためには、妊娠期・産後の女性の乳房変化を妨げず、快適感を得られるブラジャーの知見を明らかにしていく研究に取り組んでいきたい。

女性のブラジャーへのニーズは時代とともに変化していくことを念頭に、乳房ケアの担い手である助産師は、ブラジャーもケア用品であることを強く認識し、女性の快適さを追求したブラジャーについての理解を深めていくこと、さらにブラジャーの製品開発に助産師の視点を盛り込んでいきたい。

文献

- [1] 乳房トラブル(乳頭乳輪部浮腫)予防のための改良哺乳帯の作製と有効性の検討, 助産婦雑誌, 49(2), 1995.
- [2] 立岡弓子. 周産期ケアマニュアル. サイオ出版. 198, 2013.
- [3] Beatrice Fontanel. 図説ドレスの下の歴史: 女性の衣装と身体の2000年(吉田晴美訳). 東京, 株式会社原書房, 9-10, 2001.
- [4] 古賀令子. コルセットの文化史. 東京, 青弓社, 14, 2004.
- [5] Shucong, C. A probe to the Evolution of Undergarments and Its Cause. *Advanced Materials Research*, 332-334:530-533, 2011.
- [6] 辻原康夫. 服飾の歴史をたどる世界地図. 東京, 河出書房新社, 114-116, 2003.
- [7] 武田雅哉. ゆれるおっぱい、ふくらむおっぱい. 東京, 岩波書店, 11-12, 2018.
- [8] 福島利奈子. コルセットと女性像—コルセットからの解放を中心に—. 名古屋市立大学大学院人間文化研究科人間文化研究, 14:161-175, 2011.
- [9] 古賀令子. 前掲書, 107-111.

- [10] Farrell-Beck J, Poresky L, Paff J, Moon C. Brassieres and Women's Health from 1863 to 1940. *Clothing and Textiles Research Journal*, 16(3):105-115.
- [11] 青木美保子. 大正・昭和初期における洋装下着の受容. *Fashion talks... : the journal of the Kyoto Costume Institute : 服飾研究*, 1 : 10-15, 2015.
- [12] 平岩銚子. 主婦の友 10 巻 6 号. 姿をよく見せる乳おさへの作り方. 東京, 主婦之友社, 269-271, 1926.
- [13] 千葉智子. 婦人倶楽部 11 巻 8 号. 東京, 講談社, 382-383, 1930.
- [14] 三松八千代. 新時代の洋服裁縫. 東京, 目黒書店, 259, 1932.
- [15] 家事及裁縫社. 婦人子供服専門講座 第 1 巻. 東京, 家事及裁縫社, 85-87, 1935.
- [16] 尾中明代. 最新洋裁講座 第 5. 東京, 国民学芸社, 86-95, 1947.
- [17] 湯上り用ブラジャー. 週刊読売 = The Yomiuri weekly 19 巻 45 号. 読売新聞社(1960 年 10 月), 30.
- [18] うらべまこと. ファッションと下着. ファンデーション&ランジェリー年 1968 年版. 東京経済, 5-6, 1968.
- [19] 三嶋通良. はゝ乃つとめ 親の巻. 波蘭堂, 22-25, 1800.
- [20] トーマス・ブール. 母親の教(大井鎌吉訳), 東京, 丸善, 28-31, 1881.
- [21] 吉田賢子. 妊婦必読安産の心得. 東京, 保成堂, 26-27, 1897.
- [22] 有井よし. 陥没乳頭に乳バンド. 保健と助産, 7(3) : 20, 1953.
- [23] 黒田小夜子. 新製品の試み 乳房用ソフトアイスとブラジャー. 助産婦雑誌, 26(2) : 40-42, 1972.
- [24] 文化服装学院出版局. 文化服装講. 座婦人服 前篇, 東京, 文化服装学院出版局, 139-147, 1949.
- [25] 金子一子. 装苑 8(4). 東京, 文化出版局, 160-161, 1953.
- [26] ワコール. 下着教室 ブラジャーの話. 私のおしゃれ 15, 東京, ワコール, 22-23, 1958.
- [27] 藤田雪子. 藤田雪子の下着教室. 東京, 藤田雪子洋裁研究所, 119-120, 1958.
- [28] ワコール. 私のおしゃれ 17, 東京, ワコール, 17, 1959.
- [29] 辻村みよ子. ジェンダーと人権—歴史と理論から学ぶ. 東京, 日本評論社, 144-146, 2008.
- [30] 城一夫, 渡辺直樹. 日本のファッション 明治・大正・昭和・平成. 東京, 青幻社, 260-261, 2007.
- [31] 美容術講習録. 第 4 巻 着付と帯の結び方及婦人洋服の着方. 東京, 新婦人協会, 19, 1926.
- [32] 青木英夫. 下着の文化史. 東京, 雄山閣出版, 176-178, 2000.
- [33] 辻村みよ子. 前掲書, 164-165.
- [34] 田中陽子. 1930 年から 1943 年の『被服』誌上における女性服装論の歴史的意義—戦後洋装化への影響を求めて—. 日本家政学会誌, 69(4) : 225-237, 2018.
- [35] 青木英夫. 前掲書, 214-216.
- [36] 青木英夫. 前掲書, 230-231.
- [37] 石田真優, 立岡弓子. 女性の快適さを見据えた乳房サポート下着の考案. 滋賀医科大学卒業論文集, 1-10, 2019.
- [38] 和泉紗織, 岡本秋, 佐藤春奈, 大城美和, 比嘉久美子, 富浜好恵. 陥没乳頭にて直母困難と予測される妊婦への関わり. 社会医療法人仁愛会医報, 14 : 16-18, 2013.
- [39] 飯田ゆみ子. 日本の BFH 施設における妊娠中の乳房・乳頭ケアの実態調査. ペリネイタルケア, 38(4) : 391-398, 2019.

History of brassieres and Breast Care in Japan

—The meaning of the brassiere as breast care—

Minami ISONO¹⁾, Yumiko TATEOKA¹⁾

1) Department of Clinical nursing, Shiga university of medical science

Abstract Midwives who provide breast care have not been involved in research on breast underwear as a care product. Having had the opportunity to develop a product for breast underwear, we worked on literature research to clarify its history as a brassiere and as a care product. The researcher conducted a literature review from May to September 2019, a total of 35 documents were selected in the National Diet Library Digital Collection database. Around the early 19th century, there was no concept of breast support. However, it was recognized that in lactating women, breast tightening interfered with milk secretion. It had long been thought that breast tightening needed to be avoided. Brassieres as breast care products that supported the breast during pregnancy was understood in the Meiji era, and maternity brassieres attracted attention in the 1950s. The brassiere worn by women was preceded by the impression of the current brassiere, which makes the breast look beautiful, which is also a symbol of femininity, and did not develop as a care product for breastfeeding women. A midwife need to work on bra research to clarify the characteristics of bras as care products for breastfeeding women and their ideas and desires.

Keyword brassiere, breast care, underwear, literature review, history